「男、突っ走る！」

第1回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内 雅也	(16)	中央高校1年2組生徒	
木内 孝志	(45)	雅也の父	
木内 真保	(43)	雅也の母	
木内 健次郎	(12)	雅也の弟	
門野 賢哉	(16)	中央高校1年2組生徒	
木本 駿	(16)	中央高校1年2組生徒	
田崎 良樹	(16)	中央高校1年2組生徒	
山辺 一磨	(16)	中央高校1年2組生徒	
志田 悠喜	(16)	中央高校1年2組生徒	
尾形 安代	(52)	中央高校1年2組担任	
佐藤 篤	(58)	中央高校1年学年主任	
稲森 亨	(57)	中央高校1年2組副担任	

1　通学路（朝）

T「２０１１年　４月」

鼻歌を歌いながら、自転車をこいでいる木内雅也（16）。

2　木内家・全景（朝）

愛知県の海沿いの田舎の住宅街の中にある一軒家。

3　同・居間

出掛ける支度をしている雅也の母・真保（43）――弟・健次郎（12）が起床してくる。

健次郎「あれ、母さん出掛けるの？」

真保「何言ってるのよ、今日はお兄ちゃんの高校の入学式だって言ったでしょ」

健次郎「ああ、今日だったっけ」

真保「健次郎、あんた留守番頼んだわよ」

健次郎「分かった」

4　中央高等学校・校門（朝）

生徒たちが登校してくる――自転車に乗った雅也も登校する。

雅也「おはようございます！」

5　同・駐輪場

自転車を止める雅也。

6　同・昇降口

ガラスにクラス一覧表が貼られている――生徒たちがそれぞれ確認している。雅也もやってくると、自分のクラスを確認する。『1年2組』に自分の名前を確認する雅也。

7　同・1年2組教室

既に何人かの生徒が登校している。雅也が教室に入ってくると、窓側の席に座る――誰かが雅也の肩を叩き、振り返る雅也。

雅也「良樹！　かっちゃんも」
クラスメイト・田崎良樹（16）と山辺一磨（16）が立っている。
雅也「二人も二組だったんだ。同じ中学で、よく知ってる二人がいてくれて安心した」
良樹「俺もだよ」
一磨「木内と同じだったら心強い」
雅也「それはこっちのセリフだって」
良樹「木内、名簿番号何番？」
雅也「俺？　五番。まあ、最初じゃないだけマシだよ。良樹とかっちゃんは？」
良樹「俺は十九番」
一磨「俺は二十九番」
雅也「え？　何でそんな後ろなの。二十番代って、普通女子じゃないの？」
良樹「（小声で）見てごらん、このクラス」
雅也、生徒たちを見回す――女子生徒は廊下側の一列の六人しか並んでいない。雅也、それに気づくと、
雅也「もしかして、このクラス……ほとんど

男子ってこと？」
一磨「そういうこと」
雅也「そんなクラス編成あるんだ。男子ばっかで大丈夫かな」
一磨「まあ、女子が多くて殺伐とするよりかは良いんじゃない？」
雅也「（苦笑して）それもそうか。（と教室中を見回して）まあ、他にも同じ中学の子が何人もいるから、何とかなりそうかな」
良樹「だと良いけど」
雅也「でも、良樹もかっちゃんも、そんな後ろじゃ、俺どうしたら良いんだよ。（と小声で）周り、誰一人知らないんだけど」
不安な顔の雅也。
N「東日本大震災からまだ一ヶ月も経過おらず、日本が自粛ムードとなっていた二〇一一年四月上旬。僕は、自宅から自転車で三十分ほどの地元の高校に進学をしました。弟からインフルエンザを移されて、咳が止まらない状態で推薦面接を受けた日から

およそ二ヵ月。中学時代から仲の良かった友達である田崎良樹君と山辺一磨君が同じクラスであったことは何よりも心強く楽しい生活が始まるとウキウキしていましたが、その反面ほぼ男子というこの異色のクラスで一年間、無事に生活することができるのかという不安も抱いていました」

8　木内家・全景（夜）

9　同・居間

雅也が携帯電話で話している――台所で皿洗いをしている真保。

雅也「そう。今日無事に高校入学したよ。うん……それがね、うちのクラス四十人中、女子が七人しかいないんだから」

10　福岡・アパート・一室（夜）

父・孝志（44）が携帯電話で話している。

孝志「それは変わったクラス編成だな。でも雅ならどんなクラスでもやっていけるだろ。友達だって、またすぐ作れるさ」

11　木内家・居間

雅也「（携帯電話に）うん、そうだと良いけどね。男子ばっかでしょ、どんな変わった子がいるのか分からないし、前の席と後ろの席の子はお互い同じ中学校らしくて、間に挟まれてるこっちはたまったもんじゃないよ。絶対向こうは話しづらいって思ってるもん」

12　福岡・アパート・一室（夜）

孝志「（携帯電話に）まあ、最初はそういうもんだ。いずれ、そういう子たちとも話せるようになるさ。まあ、頑張れ」

13　木内家・居間（夜）

雅也「（携帯電話に）うん、まだ始まったばっ

かだもんね。何とか頑張る。じゃあ、お休み」

と、携帯電話を切ると、真保に渡す。

真保「父さん、何だって？」

雅也「お前なら何とかやってけるだろうって」

真保「そう」

雅也「父さん、今年の夏には福岡から帰ってこられるんだろ？」

真保「それがね、単身赴任、また伸びるかもしれないって」

雅也「え？」

真保「まだ確定じゃないけど、今年の夏で丸五年でしょ。もしかしたら、満期の七年になるかもしれないんだって」

雅也「七年ってことは、あと二年？　俺、高三じゃん」

真保「そうね。あんたが、小学校五年生の夏に福岡に行ったから、そうなるか」

雅也「俺は別に良いけど、健が可哀想だろ。父さんが福岡に行ってから、あいつの運動

会の親子綱引きは全部俺が代わりに出てるんだよ。このままだと、来年あいつが中学行ってからも、学校行事は俺が参加することになるってことじゃないか」

真保「まあ、その可能性はあるわね」

雅也「そっか……」

14　中央高等学校・全景（翌朝）

15　同・1年2組教室

担任・尾形安代（52）が、プリントを配っている。

安代「はい良いですか。今配ったのが、学校の見取り図です。音楽室は、渡り廊下を渡った西棟の三階です。情報の授業で使うコンピュータ室は、同じく西棟の二階です。音楽室のちょうど一つ下の階になります」

雅也、ほか生徒たちがプリントを見ながら安代の話を聞いている――雅也、ふと前を見る。一つ前の席の門野賢哉

（16）が、ふてぶてしそうな格好で座っている。雅也、不快そうな顔で賢哉の後ろ姿を見ている。

N「担任となった尾形安代先生は、温厚そうな優しい先生だった。おそらく男子が多いから、あえて女性の担任という配置になったのかもしれない。しかし、この前の席の門野君という子とは、間違いなく友達にはなれないと確信をしていた。やっぱり、気心の知れた良樹やかっちゃんが近くの席にいないことは、僕にとって内心とても心細いことであった」

16　同・昇降口（昼）

購買業者が来ており、生徒たちが並んで弁当やパンを購入している――そこに並んでいる良樹。

17　同・1年2組教室

雅也が席を移動し、一磨と一緒に弁当

を食べている――良樹が戻ってくる。

良樹「ただいま」

雅也「お帰り。先食べてた」

良樹「良いよ良いよ」

一磨「遅かったね」

良樹「結構並んだんだよ」

雅也「並ぶ時間もったいなくない？　やっぱり弁当の方が良いんじゃない」

良樹「日によって変えようかな。中学はさ、購買なかっただろ。だから、こういうところで弁当買うの何か憧れるんだよな」

雅也「まあ、その気持ちは分からなくはないわ（と弁当のふたをしめる）」

一磨「あれ、もういらないの？」

雅也「お腹いっぱいなの。高校の弁当用にって新しく弁当箱買ったんだけど、こんなにパンパンに入ってるとさすがに食べられない。無理に全部食べたら、昼からの授業眠くなっちゃう気がして」

良樹「そういうことか」

雅也「せっかく弁当箱買ったけど、やっぱり元々使ってた小さいやつで良いかもしれない」

お腹が膨れて溜息をつく雅也。

18　木内家・居間（夜）

台所で洗い物をしている真保――弁当箱を開けて、残ったおかずを見る。雅也、ソファーに座ってテレビを見ている。

真保「ねえ、お昼残したの？」

雅也「全部食べようと思ったんだけど、お腹膨れちゃって」

真保「そんなにおかずないと思うけどなあ」

雅也「多分、米の量も多いんだと思う。完食するとお腹いっぱいになって眠くなっちゃうんだよね」

真保「じゃあ、どうするの」

雅也「せっかく買ったけど、前に使ってた弁当箱で良いよ」

と、台所まで来ると、食器棚から縦長の小さい弁当箱を取り出す。

雅也「これで十分だよ」

真保「こんなちょっとで良いの。逆にお昼からの授業、集中できるの？」

雅也「お腹膨れて授業中に居眠りするよりマシだよ」

真保「けど、この弁当箱じゃ、ご飯もおかずもそんなに入らないよ」

雅也「俺、小食だから。少し食べたら十分お腹膨れるの」

真保「そう……じゃあ、明日から、この弁当箱に変えるわね」

雅也「うん。それで良いよ。おかず少ないほうが、母さんだって準備楽だろ」

呆れ顔の真保。

19　中央高等学校・駐輪場（朝）

雅也が自転車で登校してくる。

N「入学式からの三日間は、学校の規則につ

いてのオリエンテーションや、校舎見学、部活動見学などがメインでした。そして土日を挟んで、いよいよ今日は月曜日。ついに授業が始まります。教科書が入ったカバンはずっしりと重く感じました」

20　同・1年2組教室（朝）

雅也が登校してくる――席に座ると、賢哉が振り返る。

賢哉「おはよう」

雅也「（動揺して）おはよう……」

と、雅也の後ろの席に座る木本駿（16）も、

瞬「おはよう」

雅也「おはよう……」

賢哉「ようやく話せた」

雅也「え？」

賢哉「俺とこいつ、同じ中学なんだよ。間に人がいるとどうも話しづらくて。それだったら、一緒に話そうと思って」

雅也「ああ、ありがとう……」
賢哉「俺は、門野賢哉。南中出身で野球部だった」
瞬「俺は木本駿。よろしくね」
雅也「よろしく」
賢哉「みんなは俺の事をかどけん、そいつのいことをきのしゅんって呼んでるんだ」
雅也「かどけんと、きのしゅん？」
瞬「そう」
雅也「俺は、木内雅也。北中学出身。特にニックネームはないから、適当に呼んで」
瞬「木内……じゃあ、うっちーだ」
雅也「え、うっちー？　木内だから」
瞬「そう」
賢哉「ああ、それは呼びやすいかもしれないな」
瞬「だろ」
賢哉「ツリーインとか、どうだ？」
雅也「ツリーイン？　どういう意味」
賢哉「木の内側」

雅也「（一瞬考えて）ああ、そういうこと。語呂は良いかもね。ありがとう。そんなふうにニックネームで呼ばれたこと、あんまりなかったから」

瞬「じゃあ、今日からうっちー。もしくはツリーイン」

雅也「うん！　気軽に呼んで」

と、良樹が登校してくる――雅也が、賢哉と瞬と談笑している光景を見て、安堵の笑みを浮かべている。

雅也、その良樹に気が付く――お互いに笑顔でうなずく。

21　同場所（時間経過）

学年主任・佐藤篤（58）が、英語の授業をしている。教科書を見ながら、流暢な英語を話している。

篤「Hey,Mr.Kadowaki」

賢哉「は？」

篤「Please,read here」

賢哉「へ？」

雅也、教科書を賢哉に見せて、

雅也「（小声で）ここを読むの」

賢哉「ああ、サンキュー。（と教科書を読み始める）」

N「英語の教科担任は、僕らの学年主任でもある佐藤篤先生。生徒指導主任や進路指導主任なども歴任してきた人で、この先生が生徒に対して厳しいという噂は先輩から聞いていました。しかもこの人、僕が中学校の時に仲が良かった家庭科の先生の旦那さんとのこと。まさか夫婦でお世話になるなんて……」

賢哉「（雅也に）助かった」

雅也「（苦笑して）大丈夫」

22　同場所（時間経過）

体操服に着替えている一同。

瞬「ねえ、うっちー。体育の先生って、誰だっけ？」

雅也「副担の稲森先生じゃなかった？」
瞬「稲森先生？」
雅也「稲森亨先生」
賢哉「ああ、あいつか」
雅也「あいつって……」

23　同・運動場

体育の授業が行われおり、サッカーをしている生徒たち。審判の笛を吹いている副担任・稲森亨（57）。
ゴールキーパーをやっている賢哉――荒い声を出して、反対側にボールを蹴る。
やる気がないような顔でディフェンスに立っている雅也――ボールが転がってきて、足を上げて構える。しかし、その下をスルーしていくボール。
雅也「あ……」
賢哉「ちゃんと取れや！　木内！」
雅也「ごめん……！　体育苦手なの」

賢哉、ボールを手にすると、再び蹴る
――空高く舞い上がるサッカーボール。
不思議そうにそのボールを見る雅也。

24　同・廊下

体育の授業から教室に戻っている雅也、
賢哉、瞬。

賢哉「ひどかったな、さっきのは」

雅也「そりゃ、野球部の人からしたら球技なんて簡単かもしれないけど、俺は昔から運動が苦手なの。特に球技は」

瞬「そうなの？」

雅也「うん。俺の名前、親が好きだった野球選手から取ったんだけどさ、野球はおろか運動全般苦手な息子になっちゃったんだよね」

賢哉「そんなに運動苦手なのか？」

雅也「小学校の運動会は、かけっこ六年間ドベだったし、マラソン大会だって後ろから数えたほうが早い。通知表も体育だけは異

常に悪い。だから体育の授業で試合やるときは、俺と同じチームになったら絶対勝てないから、一緒にならないほうが良いよ」

賢哉「勉強はできても運動はできないんだ」

雅也「逆にかどけんは、運動はできても勉強はできないんじゃない？」

瞬「それは合ってると思う」

賢哉「おい」

と、クラスメイト・志田悠喜（16）が後ろから追い抜いていく――だるそうな顔であくびをしている。

賢哉「（雅也に）なあ」

雅也「ん？」

賢哉「俺、あいつ嫌いだわ」

雅也「志田君のこと？」

賢哉「ああ」

雅也「何で？」

賢哉「何か気に入らん」

雅也「何それ？」

賢哉「何か、やる気なさそうな顔してるじゃ

ん」

雅也、突然笑い出す。

賢哉「何がおかしいんだよ」

雅也「俺も、かどけんをそんな風に見てた」

瞬「そうなの？」

雅也「うん。何かやる気のない、態度のでかそうな人だから、絶対友達にはなれないって思ってたの。でも今日こうやって一緒に行動して、根は良い子なんだろうなって思ったよ」

賢哉「まあ、最初の印象から変わったなら良かったよ」

お互い笑いながら教室に戻っていく雅也、賢哉、瞬。

N「前の席のかどけん、そして後ろの席のきのしゅん。新しい友達が一気に二人もできたことで、このクラスで楽しい生活ができるという確信が僕にはありました」

つづく